

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23593437

研究課題名(和文) 認知症高齢者のその人らしさを保証するコンフォートケアモデルの開発

研究課題名(英文) Development of a Comfort Care Model to Maintain the Personhood of Elderly Dementia Patients

研究代表者

原 祥子 (HARA, SACHIKO)

島根大学・医学部・教授

研究者番号：90290494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：介護老人保健施設に適用できる認知症ケアガイドラインを開発した。この認知症ケアガイドラインにそったケアスタッフの実践は、入所者の在宅復帰率を高くし、ケアスタッフの仕事満足度を高くすることを実証した。

入浴時におけるローズ水を用いた芳香療法は、認知症高齢者の感情を穏やかにすることを明らかにしたが、入浴ケアを行うスタッフのストレス軽減効果について統計学的に実証することはできなかった。また、写真を用いた回想法は認知症高齢者の認知機能の維持・改善の可能性があることが示唆され、回想法に関わった介護士の認知症高齢者ケアに対する認識の変化の様相を提示した。

研究成果の概要(英文)：We have developed dementia care guidelines that can be applied in elderly health care facilities and verified that the implementation of the guidelines by care staff helped increase the rate of residents returning to their home and the satisfaction levels of care staff at work.

While it was proved that aromatherapy using rose water for bathing soothed the nerves of elderly dementia residents, we failed to statistically prove the effect of reducing stress levels of staff who bathed them. Our study indicated that reminiscence therapy using photos could maintain and improve cognitive function in elderly dementia patients and showed a change in the perception by nurses involved in reminiscence therapy when caring for elderly dementia patients.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症ケア

1. 研究開始当初の背景

「認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト」による報告書(2008年)では、今後の認知症対策として重要なのは、認知症ケアの標準化・高度化の推進により、適切な医療・介護サービスを提供するとともに、本人やその家族の生活を支援し、認知症ケアの質の向上を図ることであると指摘している。認知症ケアは「その人らしさ(personhood)」の尊重こそ重要であるとするパーソンセンタードケアの理論が提唱されるなど、認知症ケアの質向上への関心は高まり、注目を集めている。しかしながら、わが国の高齢者施設における認知症ケア実践は、個々のケアスタッフの経験に依拠した試行錯誤が重ねられているのが実情であり、高水準の認知症ケアの質が維持できるケアの内容を具体的に示すガイドラインについては、十分な検討をふまえた提示には至っていない。

認知症高齢者が施設ケアを利用する場合、特有のストレスが高齢者本来の能力を狂わせてしまうことも多く、認知症高齢者の生活に困難をもたらすことが知られている。認知症高齢者が施設で安心して快適な生活を送っていくためのケアモデル、パーソンセンタードケアの理論に基づいて換言するなら、その人らしさを保つためのケアモデルの開発が急務である。一方、認知症高齢者の「その人らしさを保つ」というのは、コルカバが定義したコンフォートの概念に適合する。そこで、本研究ではコルカバのコンフォート理論を踏まえ、認知症高齢者にコンフォートを与えるプロセスを明らかにする。また、最近では認知症高齢者に対して回想法やライフレビューなどがよく実践されている。このような介入は、ケアリングの要素を含んでおり、コンフォートを与える手段(介入)と言えるが、その効果については完全に一致した結果が得られていないのが現状であるため、その実証的な検討を行う。

2. 研究の目的

認知症高齢者にコンフォートを与えるプロセス(ケアスタッフの行為)を明らかにすること、つまり認知症ケアの質を確保するためのガイドラインを開発することを第1の課題とした。同時に、認知症高齢者に対するコンフォートケアの実践と、困難でストレスフルな仕事を成し遂げようとするケアスタッフのコンフォートとの関連についても実証的に検討する。さらに、ケアスタッフのコンフォートケア実践の程度と施設のアウトカムとの関連についても検証する。

また、認知症高齢者に対するケアリングの方法に則った介入がコンフォートの増進を導き、さらに健康探索行動(認知レベルの改善等)が強化されるというモデルを設定し、その実証的な検討を行うことを第2の課題とした。

3. 研究の方法

(1) 介護老人保健施設に適用できる認知症ケアガイドラインを開発することを目的として、看護・介護職員594人に調査票を配布し380人の有効回答を分析した。「安心を高める環境づくり」「生活の継続性への支援」「その人の潜在能力を引き出す支援」「安全に社会とのつながりをもてる暮らしへの支援」「家族との協働を含めた一貫したケア」「家庭での療養への移行に向けた支援」を一次因子、「認知症高齢者ケア」を二次因子とする二次因子モデルを構成し、その構成概念妥当性を因子モデルと外的基準(仕事満足度)との関係において構造方程式モデリングで検討した。

(2) 介護老人保健施設におけるケアスタッフの認知症ケア実践と施設のアウトカム(在宅復帰率・在所日数)との関連について検討することを目的として、14施設の看護・介護職員を対象に自記式質問紙調査を実施した。(1)で開発した認知症ケアガイドライン(6領域29項目)を用い、各項目について「いつも行っている(=5)」～「ほとんど行っていない(=1)」の5件法で認知症ケアの実践頻度を測定した。「認知症高齢者ケア」を二次因子とする二次因子モデルを構成し、さらに「認知症高齢者ケア」を独立変数、「在宅復帰率」と「平均在所日数」を従属変数とするモデルを設定し、その適合度を共分散構造分析で解析した。

(3) 介護老人保健施設入所中の認知症高齢者の入浴行動過程においてローズ水を用いた芳香療法を行い、認知症高齢者の感情の安定性を検討した。10名を対象とし、芳香を用いない入浴(A1)1回の後に、芳香を用いた入浴(B)を1回、その後に芳香を用いない入浴(A2)を1回設けて、認知症高齢者の脱衣室と浴室における入浴行動過程(脱衣-洗髪・体洗い-浴槽に入る-着衣)の観察による感情評価を行った。感情は「happy」、「neutral」、「unhappy」に分類し、2分毎に評価した。「happy」数と「unhappy」数の差を「穏やかさスコア」とした。この得点について、芳香を用いない入浴(A1)と芳香を用いた入浴(B)そして2回目の芳香を用いない入浴(A2)において分散分析を行い、その後多重比較を行った。

(4) 認知症高齢者の入浴ケア場面においてローズ水を用いた芳香療法を行い、ケア提供者のストレスに対する効果を検証することを目的として、芳香を用いない入浴と用いた入浴を実施し、それぞれの入浴のケア前と後で、ケア提供者11名の唾液アミラーゼ値を測定した。この値を、芳香を用いない入浴と用いた入浴とでマンホイットニーのU検定を用いて比較した。

(5) 介護老人保健施設入所中の認知症高齢者を対象に写真を用いた回想法(グループ及び個人)を実施し、参加高齢者の認知機能に及ぼす影響について検討した。1回/週(30分程度/回)のグループ回想法を5回、個人回想法をグループ回想法の合間に2回(5分程度/回)の計8回実施した。いずれの回想法でも、参加高齢者の昔の写真や、季節の行事等の一般的な写真をタブレット端末上に提示し、その写真をみながら会話をすすめていく方法をとった。回想法に参加した高齢者は4名(70~80歳代)で、認知症自立度は3名、 Δ が1名であった。第1回グループ回想法の前と第5回グループ回想法の後に、TDASプログラムで認知機能を評価し、回想法の前後におけるTDASの点数の差を検討するために、Wilcoxonの符号付き順位検定による解析を行った。

(6) 介護老人保健施設入所中の認知症高齢者を対象に写真を用いた回想法(グループ及び個人)を実施し、個人回想法に関わった介護士の認知症高齢者ケアに対する認識がどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。1回/週(30分程度/回)のグループ回想法を5回、個人回想法をグループ回想法の合間に2回の計8回実施した。個人回想法は、介護士と1対1での日常ケアにおける会話として、参加高齢者の居室で5分程度行ってもらった。4名の参加高齢者それぞれに個人回想法を1~3回行った介護士4名を対象に、第1回グループ回想法の前と第5回グループ回想法の後に、各参加高齢者をどのように捉え、関わっているかについて半構成的面接を実施した。回想法の前後の面接データを対比させながら介護士の認識の変化をあらわしている特徴的な発言を抽出し、類似性に基づいて分類整理した。

4. 研究成果

(1) 6因子29項目で構成したガイドラインの因子モデルのデータへの適合性ならびに認知症高齢者ケアと仕事満足度の関係が統計学的に支持された。本研究で開発した認知症ケアガイドラインは、介護老人保健施設における看護・介護職員が認知症ケアの実践を振り返りながら自己評価するために有用であり、認知症ケアの質確保に有効に機能することが示唆された。さらに、看護・介護職員の仕事満足度を高めていくうえで、認知症ケアガイドラインの活用は有用な資料をもたらすものと推察された。

(2) 「認知症高齢者ケア」を二次因子とする二次因子モデルを構成し、「認知症高齢者ケア」を独立変数、「在宅復帰率」と「平均在所日数」を従属変数とするモデルの適合度は、CFI=0.851、RMSEA=0.068であり、概ね許容できる水準にあると判断した。「認知症高齢者ケア」から「在宅復帰率」に向かうパス係数

(0.165)は統計学的な有意水準を満たしていたが、「平均在所日数」に向かうパス係数は非有意であった。認知症ケアガイドラインにそったケアスタッフの実践は平均在所日数とは関連しないが、在宅復帰率を高くすることが示唆された。

(3) 芳香を用いない入浴(A1)と芳香を用いた入浴(B)の間($p=0.003$)、芳香を用いない入浴(A2)と芳香を用いた入浴(B)の間($p=0.002$)で有意差が認められ、入浴時におけるローズ水を用いた芳香療法は認知症高齢者の感情を穏やかにする効果をもたらすことが示唆された。

(4) 芳香を用いない入浴ケア前のケア提供者の唾液アミラーゼの平均値は 58.1 ± 50.5 kIU/L、ケア後の平均値は 79.2 ± 77.7 kIU/Lであった。一方、芳香を用いた入浴ケア前の平均値は 63.1 ± 41.7 kIU/L、ケア後の平均値は 61.5 ± 72.2 kIU/Lであった。ケア前後の差の平均値は芳香を用いない入浴時が 21.1 ± 38.6 kIU/L、芳香を用いた入浴時が -1.6 ± 61.0 kIU/Lであった。芳香の有無で有意差はみられなかった($p=0.22$)。認知症高齢者の入浴にローズ水を用いた芳香療法がケア提供者のストレスを軽減させると結論づけることはできず、継続した介入と検討が必要と考えられた。

(5) 対象者が4名と少ないために、回想法の前後で認知症高齢者のTDASの点数に差は認められなかった($p=0.144$)。個別に点数の変化をみると、4名中3名で認知機能の改善傾向(54 38; 83 31; 60 26)が示され、1名はほぼ横ばい(25 26)であった。高齢者自身の昔の写真や、季節の行事や遊びなどの一般的な写真を提示しながら行う回想法を、グループ回想法と個人回想法を組み合わせ実施していくことは、認知機能の維持・改善の可能性があると示唆された。

(6) 個人回想法に関わった介護職員の認知症高齢者ケアに対する認識の変化として15の内容が見出され、4つのカテゴリーに分類された。《その人がよくわかる》には その人をより深く知る 新しい発見がある その人の強みに気づく 予想以上に記憶が保持されていたことに気づく 認知症の程度が進んでいたことに気づく 今のありようを認知症の症状と関連づけて捉える の6つの内容、《その人への関心が高まる》には 親しい間柄になる もっと話したいと思う の2つの内容、《日常のコミュニケーションが円滑になる》には 話しかけやすくなる コミュニケーションをつなぐコツをつかむ 個別の情報を日常会話に活かす 表情よく日常会話がはずむ 普段の会話の回数が増える の5つの内容、《関わることの喜び・楽しさを実感する》には コミュニケー

ションがとれることを嬉しく思う コミュニケーションを楽しむ の2つの内容が含まれた。認知症高齢者に対する個人回想法の実践を通して、介護職員は《その人がよく分かる》と実感したうえで、よりいっそう《その人への関心が高まる》という変化を生じていた。そして、以前より《日常のコミュニケーションが円滑になる》と認識され、《関わることの喜び・楽しさを実感する》ことにもつながっていると考えられた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

原 祥子、實金 栄、介護老人保健施設における認知症ケアガイドラインの開発、日本看護研究学会雑誌、査読有、Vol.35、No.4、2012、pp.75-81、DOI: 10.15065/jjsnr.20120717008

竹田 裕子、原 祥子、小野 光美、小林裕太、中村 守彦、介護老人保健施設入所中の認知症高齢者の入浴行動過程における「さ姫」ローズ水を用いた芳香療法の有用性、島根大学医学部紀要、査読有、Vol.35、2012、pp.23-31、<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/m/28526>

[学会発表](計14件)

Sachiko Hara、Influence on Cognitive Function of Reminiscence Therapy Using Photographs for Elderly Persons with Dementia、30th International Conference of Alzheimer's Disease International、2015年4月15~18日、パース(オーストラリア)

Yuko Takeda、Sachiko Hara、Effect of Aroma Therapy Using Rose Water in Bath of the Elderly with Dementia; Mental Effect in Care Givers、29th International Conference of Alzheimer's Disease International、2014年5月1~4日、サンジュアン(プエルトリコ)

Sachiko Hara、Mikiko Sato、Influence on Care Staff of Individual Reminiscence Therapy Using Photographs for the Elderly with Dementia; a Change in Care Staff Awareness about Care for the Elderly with Dementia、The 9th International Nursing Conference & the 3rd World Academy of Nursing Science、2013年10月16~18日、ソウル(韓国)

原 祥子、佐藤 美紀子、有持 佑亮、廣富 哲也、認知症高齢者の回想法に関わった介護職員の高齢者ケアに対する認識の変化、第3回日本認知症予防学会学術集会、

2013年9月27~29日、朱鷺メッセ(新潟県・新潟市)

原 祥子、有持 佑亮、廣富 哲也、認知症高齢者に対する写真を用いた回想法が認知機能に及ぼす影響、第3回日本認知症予防学会学術集会、2013年9月27~29日、朱鷺メッセ(新潟県・新潟市)

Sachiko Hara、Sakae Mikane、Saki Hasegawa、Difference Between Nurse and Professional Caregiver in Dementia Care at Geriatric Health Service Facilities、The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics、2013年6月23~27日、ソウル(韓国)

竹田 裕子、原 祥子、小野 光美、小林裕太、長谷川 沙希、介護老人保健施設のケア提供者に対する芳香の効果 - 認知症高齢者の入浴ケアにローズ水を用いた芳香療法を取り入れて -、日本老年看護学会第18回学術集会、2013年6月4~6日、大阪国際会議場(大阪府・大阪市)

Yuko Takeda、Sachiko Hara、Saki Hasegawa、Mitsumi Ono、Morihiro Nakamura、Usefulness of Aromatherapy ("SAHIME" Rose Water) on Bathing Process for Elderly with Dementia Living in a Geriatric Health Service Facility、28th International Conference of Alzheimer's Disease International、2013年4月18~20日、台北(台湾)

原 祥子、實金 栄、長谷川 沙希、介護老人保健施設における認知症ケア実践と在宅復帰率及び在所日数との関連、第32回日本看護科学学会学術集会、2012年11月30日~12月1日、東京国際フォーラム(東京都・千代田区)

竹田 裕子、原 祥子、小野 光美、中村守彦、認知症高齢者の入浴ケアにおけるローズ水を用いた芳香療法の有用性、第2回日本認知症予防学会学術集会、2012年9月7~9日、北九州国際会議場(福岡県・北九州市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

原 祥子(HARA, Sachiko)

島根大学・医学部・教授

研究者番号: 90290494